●書学書道史学会
会報
第9号

平成17年(2005)6月1日発行
編集・発行
書学書道史学会
事務局
東京都渋谷区桜丘町29-35
〒150-0031 美術新聞社内
TEL(03)3462-5251㈹
FAX(03)3464-8521㈹

『書道史事典』編集完了報告

中村　伸夫

昨秋の第十五回書学書道史学会大会での編集局報告の中で、諸般の事情により刊行が大幅に遅れている『書道史事典』の編集作業が、学術局・編集局合同で編成された事典編集委員会から、編集局にバトンタッチされたことについて報告した。あれから半年余になるが、このほど編集作業が完了したので、簡単に経過を報告したい。

二〇〇〇年九月に東京で開催された国際学会「第四回国際書学研究大会」の準備活動の一環として、本学会編の『書道史年表』が萱原書房から刊行されたのは一九九九年七月のことであった。今回の『書道史事典』は、この『年表』に肉付けして斯学の振興に資する新たな出版物として企画されたもので、学術局長（当時）の大野修作氏と編集局長（同）の大橋修一氏を編集委員会代表として編集作業が開始された。大野氏は執筆者宛の一文の中で、次のような三項目の編集基本方針を掲げている。

一、過去の書道史事典の類は、客観性を重んずるあまり、中立・客観的ではあっても事実を羅列することに終始し、しかも最新の研究状況を紹介しようとする意欲的、積極的な姿勢に欠ける恨みがあった。

二、客観的事実を正確に記述することが事典の基本的使命であることは確かであるが、それも執筆者の主観性による光が当たってこそ、記述内容は輝きを増すはずである。

三、従って今回編集する新しい事典では、執筆者は史料や事実に対して自らの歴史観や感性、信念を武器に格闘しつつ、しかもできるだけ平易に分かりやすく執筆するという基本理念を共有して、作業を進めて行くこととする。

上記の方針のもと、編集委員会で選定されたのべ約五〇〇項目について、学会役員を中心とする三八名がそれぞれに専門的見地から執筆を担当することになったのは、二〇〇一年の夏のことであった。そして二〇〇二年中には、各執筆者からの原稿はほぼ出揃った。しかし、その後の作業は難航した。難航したのは、挿入図版の確定に手間取ったこと、文体や用語、表記の統一やルビに関する問題、また当初詳細に付記を予定していたキーワードや参考文献の扱い、そして索引の付け方など、難問が山積したからである。しかし、昨年に至り進捗状況の総点検が行われた結果、編集はほとんどの面で既に実務的段階に入っていることから、作業を学会編集局と書肆の編集部に移して完成を急ぐ方針が理事会で決定され、以後編集局が主体となって鋭意作業を進めた結果、ここにようやく編集完了に漕ぎつけた次第である。

編集局の管轄となって以降の作業は、主として中国部門の前半を菅野智明幹事が、後半を中村が、日本部門を森岡隆理事が担当した。そして最終段階では、この企画の一貫した先導役である萱原晋事務局長と中村が全体の作業に従事した。もちろん本書の土台を作ったのは、大野氏、大橋氏をはじめとする当初からの編集委員会のスタッフ各位と執筆者各位であり、完成は諸氏のご協力の賜物であることは、論を俟たないところである。

なお、書肆によると、今後の予定としては七月十八日に見本本が完成し、同二十日過ぎには書肆より会員各位宛に案内文書が発送されて販売も始まる見通しで、定価は一冊一八九〇円(税込)、奥付記載の初版発行日付は「平成十七年九月十日」とする方針とのことである。

第16回書学書道史学会大会へのご案内

第16回書学書道史学会大会は、徳島市の四国大学文学部書道文化学科が当番校となり、以下の日程で開催される。詳細は本会報の次号（十月一日発行予定）でお知らせするが、現在までに固まっている大要は以下のとおりである。

○理事会＝十月二十八日（金）午後四時三十分から、ホテルグランドパレス徳島（徳島市寺島本町西一―六〇―一）にて開催。

○大　会＝二十九日（土）午前九時、四国大学交流プラザ（写真、徳島市寺島本町西二―三五―八）の一階入口にて受付開始。九時三十分から総会。引き続き研究発表。

○懇親会＝二十九日（土）午後六時から、ホテルグランドパレス徳島にて開催。

○特別展見学会＝三十日（日）午前十時から、徳島県立文学書道館（徳島市中前川町二―二二―一、交流プラザから徒歩約十分）にて。本学会副理事長・四国大学教授杉村邦彦氏ならびに本学会会員・京都女子大学講師大橋成行氏による列品解説を予定。

なお、徳島県立文学書道館では今大会開催に合わせて、「近代日中書法交流史を担った人々」展を開催する。この特別展は、（1）楊守敬と日本人書家との交流、（2）張廉卿と宮島詠士、（3）羅振玉と京都学派、の三本を柱として構成し、今大会期間中は、このうちの（1）が開催される予定。

【備　考】

○会場への交通＝JR徳島駅から徒歩約五分。徳島空港からバス約二十五分、タクシー約二十分。京阪神方面からは、高速バスで約二時間から二時間四十分。徳島駅前下車。

○二十九日の各研究発表終了後、同じ交流プラザにて杉村邦彦氏による特別講演「近代日中書法交流史に関する遺墨・資料」を予定。

○徳島市内はホテル事情に恵まれているので、学会としては特に宿泊の手配をしない。各自で早めに準備して下さい。

第一回「書学書道史学会会員のための特別鑑賞セミナー」報告

横田　恭三

昨年十一月の本学会総会において普及委員会が承認され、主として(1)特別鑑賞セミナー(2)研究発表会、の二つの普及活動を推進することとなった。

これを受けて、去る二月二十七日（日）、東京都世田谷区の五島美術館において、第一回「書学書道史学会会員のための特別鑑賞セミナー〈宇野雪村コレクションと日本の名品〉」が開催された。

今回の鑑賞セミナーは、五島美術館の全面的な協力によって実現したもので、午後一時三十分～三時三十分までの二時間が設定された。第一部は〈宇野雪村コレクション鑑賞〉、第二部は〈日本の名品鑑賞〉である。事前に申し込みされた約五〇名の参加者の前で、四名の学会理事らによる簡単な解説を行った後、名品を直に参観するという、かなり贅沢な企画を試みた。鑑賞品目は以下の通り。

第一部　①張景造土牛碑　②爨宝子碑（初拓玉字）　③刁遵墓誌（呉昌碩題跋）　④高貞碑（楊峴・羅振玉題簽）　以上解説　澤田雅弘

⑤雁塔聖教序　⑥蘭亭序（神龍半印本＝富岡鉄斎旧蔵）　⑦十七帖（明搨欠十七行本）　以上解説　鈴木晴彦

⑧黄庭経（宋拓心太平本）　⑨宋拓群玉堂残帖　⑩餘清斎帖（楊守敬題簽）　以上解説　河内利治

第二部　古筆寄合書　①伊予切　②戊辰切　③東大寺切　以上解説　名児耶明

なお、司会進行は横田恭三が担当した。

本年度・第16回大会研究発表募集

今秋の第16回大会は、阿波の地・四国大学で開催されます。２日目の特別鑑賞行事は、徳島県立文学書道館での特別展示の見学を予定しています。本学会が四国の地を踏むのは初めての事です。また、四国大学は「四国大学交流プラザ」（２ページ写真参照）という立派な施設を完備しています。整った環境の中で、熱い議論を展開したいと思います。会員の皆様の発表申し込みをお待ちしております。

記

1）日時：平成17年10月29日（土）午前～午後（今年度も日本部会・中国部会・全体会の分科会方式を採用する方針です）
2）発表時間：各40分間（質疑応答時間10分を含む）
3）申込方法：適宜の形式の「大会発表申込書」に標題・氏名を明記し、800字程度のレジュメを別紙で添えて下さい。
4）レジュメの形式：発表決定の方のレジュメは、10月１日発行の本会報第10号に掲載する予定です。形式は原則としてワープロで作成し、テキスト形式でフロッピーディスクに保存して提出して下さい（メール可）。なお、レジュメには図版や表は掲載できません。
5）申込締切：平成17年7月12日（火）＝必着＝
6）決定と通知：学会理事会および大会運営委員会で決定し、個別にお知らせします。

※本大会発表については、編集委員会は学会誌『書学書道史研究』第16号（平成18年秋刊）への論文投稿申し込みを受理したものとして扱いますので、改めての学会誌への投稿申し込みは不要です。
※発表者の論文原稿の締切は、平成18年３月末日です。原稿は、査読委員会で採否が決定されます。学会誌掲載についてご不明の点は、編集局まで文書でお問い合わせ下さい。
※大会発表申込書とレジュメ（フロッピーディスク添付可）は、封筒に「発表申込・レジュメ在中」と明記して、下記宛にお送り下さい。事故をさけるため、配達記録郵便または宅配便をご利用下さい。

〈送り先〉〒150-0031　東京都渋谷区桜丘町29-35　ヴィラ桜ケ丘ビル７Ｆ
書学書道史学会国内局・大会運営委員会　宛

新入会員紹介（16・9～17・4）肩書は入会時

下田章平　S56年生　北海道教育大院生
倉橋昌之　S37年生　堺市博物館研究員
山本まり子　S44年生　日本大学助手
鈴木龍之介　S55年生　四国大院生
櫻木享子　S57年生　四国大院生
清水香代子　S21年生　四国大院生
佐々木肇　S55年生　四国大院生
高口盛幸　S56年生　四国大院生
若松志保　S52年生　鹿児島県立高教諭
島田昌広　S52年生　大東文化大院生
竹添葉子　S56年生　大東文化大院生
中村信宏　S53年生
草津祐介　S56年生　東京学芸大院生
細川太郎（太翠）S51年生
石丸真弥　S55年生　大東文化大院生
藤田尚美　S56年生　大東文化大院生
藤森大雅（大節）　S56年生　大東文化大院生
幸喜洋人　S53年生　大東文化大院生
吉田悟　S52年生　創価大院生
高橋由利子　S52年生　大東文化大院生
庄村真琴（竹尹）S52年生　大東文化大院生
西原大輔（大卿）S56年生　大東文化大院生
中嶋章乃　S55年生　東京学芸大院生
水田至摩子　S45年生　畠山記念館学芸員
渡瀬仁　S54年生　四国大院生

研究発表会開催のお知らせ

普及委員会

「主として、学生・若手の会員に発表の場を設けて、研究の活性化と研究者の育成を図る」という目的で、第一回研究発表会を次の通り開催する運びとなった。総会の決定を受けて以後、複数の会員から研究発表会に対しての問い合わせがあり、発表者の推薦もあった。今回は初めての試みということもあり、普及委員会主導で以下の三名の方々に発表していただくことになった。

第一回研究発表会
日時：九月十八日（日）午後一時～
場所：大東文化大学・板橋校舎
東京都板橋区高島平一―九―一
都営三田線「西台駅」下車徒歩10分
（参加無料です。会員お誘い合わせの上、ふるってご参加ください）

〈学生・若手の会員による研究発表〉

1、十二世紀書写とされる『和漢朗詠集』の諸伝本について　山本まり子

平安時代書写とされる諸伝本のうち、『和漢朗詠集』の数は三十余種に上り、成立時に近いと思われる貴重な資料が数多く残されている。しかし、先学の研究を辿ると、本文の研究においては、堀部正二氏の研究『伝藤原定頼筆和漢朗詠集山城切解説及釈文』（昭和十四年）以後は殆ど行われていないといってよい。同氏は、諸伝本を、主に本文の面から三大別されたが、このように諸伝本の本文性格を明らかにする試みは、書の研究の基盤ともなり得るものと考える。発表者は、従来、十二世紀書写と推定される諸伝本に関して、それぞれの本文の性格を分析し、書写史上の位置付けを試み、その成果を公表してきた。今回はその中の「藤原伊行筆葦手本和漢朗詠集」について述べるが、本文に焦点を当てた本考察結果からも、書風上、「世尊寺流」としての共通性が認められる数種の伝本では、世尊寺家及びその周辺の人々に継承されたと考えることが可能となった。

2、南宋書法にみる「墨跡」の源流について
―禅僧と文人の接点・張即之書風の伝播を中心に―　峯岸佳葉

我が国では「墨蹟」を禅僧を中心とするものの「破格」の書と理解することが支配的である。しかし、私は南宋の書を調査する中で、禅僧の書と同時代の文人の書が共通の特徴を持っていることに気づき、「墨蹟」を破格と見るのみではすまされないと考えるに至った。諸史料の検討によると、初期の「墨蹟」の請来の筆頭にあげられるのは、円爾弁円である。更に、来朝僧・蘭渓道隆や、それに続く兀庵普寧、無学祖元の存在も大きい。本発表は、これらの入宋僧や来朝僧を核に、その源流を探ろうとするものである。今回、当時の禅僧・無文道璨の『無文印』や物初大観の『物初賸語』などの禅僧の詩文集を検討し、張即之の交流範囲は無準師範門下の禅僧に限らず、大慧派の笑翁妙堪の周辺にも及ぶことが明らかになった。本発表では、文献の記載の検討と、「墨蹟」書風の造形的検討の両面から、張即之の影響の及んだ範囲の想定を試み、更には、多くの「墨蹟」に共通する豪放な書風の起源を初期の作例中に見出すものである。

〈一般会員による研究発表や余話〉

3、二世中村蘭台の書画篆刻――一つの文人像――　河野　隆

文雅を愛する心を持ち、何らかの方法で自分を表現できる人を文人と呼ぶ。昭和を代表する篆刻家・二世中村蘭台は「老子語印五十種」などで名高いが、その書も風韻豊かで定評がある。さらに、盆や茶托などの生活周辺の雑記にも、その感覚を生かした味わい深い作を残している。それらの作品と、恬淡とした人柄と、その生き方がまさに文人の名にふさわしい一人であろう。所蔵の書画篆刻を通して活動の一端を紹介し、一つの文人像をクローズアップしたい。

ノート

瑣事―「宋拓善才寺碑」と王澍の題籤・題跋―

澤田　雅弘

三井文庫所蔵の宋拓「善才寺碑」は、もと臨川李氏四宝の孤本の一つであるが、周知のとおり、後人が本来の書者名「魏栖梧」の三字を取り去って、「褚遂良」にすり替えている。その作偽を見破ったのは王澍（一六六八～一七三九）である。王は褚遂良の生涯と碑文との間の矛盾を洗い出して、書者は褚遂良にあらずと断定し、その後さらに趙明誠の金石録第五巻の目の記述に気づいて、「魏栖梧の正書」と改題するにいたった。王のこの考証と改題の経緯とを記した跋は、その『竹雲題跋』『虚舟題跋』に収録されている。

原帖にある翁方綱（一七三三～一八一八）の跋には、この王跋を引用したうえで、「本帖にあるはずの魏栖梧書と改題した王の題籤がないのは、値打ちを下げたくない者が改装したからだろう。だから、褚書と信じて疑わない馮銓の跋だけを留めてあるのだ」と書いている。しかし、改題した王の題籤があったはずというのは翁の誤認で、中田勇次郎氏の解説に、「原帖に王澍の跋があったはず」というのも、翁に引きずられた誤解である。

そもそも王澍は、所蔵者から十数日ほど借翫した際に疑いを抱き、考証を進めて「褚遂良」三字が後人のすり替えによる偽款と確信したが、この時まだ金石録目の記述には気づかず、したがって、魏栖梧の書であることを知るには至っていない。王は一本を全臨して跋を書き、原帖を返却したが、王が跋を書き入れたのは、王跋に「其の旧に仍りて此の一本を臨し、其の偽を弁ずるを為すこと此の如し」という通り、原帖ではなく、全臨冊なのである。なぜ原帖に跋を書かなかったか。一に所蔵者への配慮だろうが、偽託を確信しつつも書者名を特定できないわだかまりも後押ししたであろう。金石録目の記述「盧渙の撰、魏栖梧の正書」に気づいたのは、その後の雍正六年（一七二八）八月二七日のことで、王はその喜びを「乃ち此の碑果たして褚公の書に非ざるを知る。余の疑ふ所、一一是なり。遂に改題して魏栖梧の善才寺碑と為す。十載の疑国、一旦にして氷解す。之が為に大いに快し」と記している。すなわち、原帖を返却して十年が経っていた王には、原帖の題籤を改める機会はなく、「宋拓善才寺碑　魏栖梧書」に改題しうるのは、当然、十年前の全臨冊の題籤以外にない。『竹雲題跋』『虚舟題跋』所収の跋は、原帖を借翫し返却した時点での跋に、十年後の疑問氷解時の思いを追記した内容になっている。翁の誤認は、その時間の二重構造に気づかなかったことによる。

右の王の全臨冊の原件と思しいものが伝世する。浙江図書館蔵の「王澍臨善才寺碑冊」（『中国古代書画図目11』所収）がそれで、王の全臨と、三種の跋―すなわち①康熙五七年（一七一八）一一月九日、全臨完了時のもの、②その翌年の元日のもの、③康熙六一年六月一日に五月二八日表装を終えたと記すものの三種―からなり、②が、金石録目に気づく以前、すなわち十数日の借翫直後の跋にほかならない。同冊から、王の借翫期間が康熙五七年一一月九日を挟んだ十数日であることと、その康熙五七年から改題時の雍正六年との間は、「十載の疑団」の文字通り十年であったことも判明する。

随想

想定の範囲外

横田　恭三

このところのインターネットの普及には目覚ましいものがある。情報の正否を見極める必要性から、両刃の剣という側面も否定できないものの、世界の出来事をその日のうちに知ることができる点で有効である。スマトラ沖地震、中国の反日デモなど、あらゆるニュースをいつでも検索できる。社会の動向だけでなく、文物考古の情報も同様に得ることができる。

私の場合、インターネット画面の〈お気に入り〉という項目に、有益なウェブサイトを登録している。クリックするだけでいつでも瞬時に希望するサイトへジャンプするという便利な装置である。その〈お気に入り〉には、中国の考古文物関係のサイトがいくつも登録してあって、一週間に一、二度の割合で、ニュースをチェックしている。

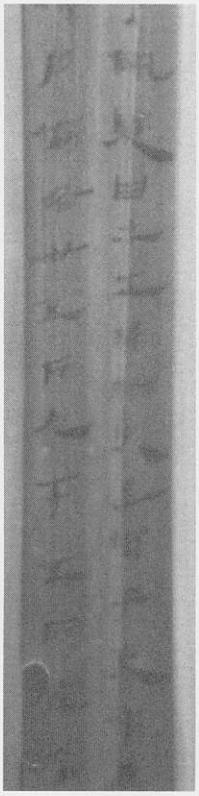
昨春の話だが、一月一二日発〈新華網〉＊に「長沙走馬楼出土万枚漢武帝時代漢簡」とタイトルされた報道記事とともに、かなり鮮明な簡牘の画像三枚が掲載されていた。その記事には、「皇室の詔書や起訴状、官僚の経済犯罪や職務犯罪の調査と裁判記録などが記された前漢時代の簡牘が、長沙走馬楼から一万枚余りも出土した。専門家は、馬王堆漢墓の発掘に次ぐ、前漢時代考古学的大発見である。」と記されていた。

さらに、一三日発〈中国網〉には「走馬楼といえば、一九九六年に、三国時代の呉簡が一四万枚出土して、考古学界や書道界を驚かせたが、今回は第八号井戸から漢簡一万枚余りが出土した。この井戸は、走馬楼呉簡が発見された井戸から九五ｍのところに位置する。発掘の責任者である宋少華氏は、洗浄したのは百枚余りで、漢武帝早期（前一二五～一二〇年）のものであることがわかったという。書体は隷書、内容は当時の公文書がほとんどで、私文書は一枚だけであった。」とある。（二月一八日発行の「中国文物報」では、長沙王劉庸のものであろうと見られている。）

昨年八月六日から四日間、長沙で〈馬王堆漢墓発掘三〇周年記念国際学術討論会〉が開催された。中国内外から百名以上の研究者が参加し、これに合わせて湖南省博物館で「長沙国文物特展」も開催された。そこにこの漢武帝時代の簡牘四枚が特別展示されていた（図）。大胆な筆致の隷書二行が、長さ約三五センチの竹簡に書かれてある。結構は扁平だが、四枚それぞれ表情があって、横画は水平なものもあれば、右肩上がりのものもある。時に波磔を強調したり右下や真下へ一気に延ばす線などが特徴的である。毛先だけで書いた細線と思い切りよく開いた太線がほどよく調和し、かつ躍動している。この小気味よい太細の変化は、書き手が筆の開閉を意識した結果であり、古くは天水秦簡や里耶秦牘にまで遡ることができる。こうした用筆が難なくできる仕立ての筆とは、比較的短鋒のものということになろう。戦国・包山楚墓出土の筆の鋒長は三・五cmもあった。睡虎地のそれは二・五cm、連雲港のは一・六cmである。というように、時代が降るにつれて、筆の鋒長はしだいに短くなる傾向にあるといえる。

長沙訪問の際、武帝時代の漢簡がいつ頃公開されるのかなどと質問しようと思っていたのだが、〝想定の範囲外〟の粋な計らいに思わず喜びの声を発してしまった。

＊注：「新華」は新華社通信。「網」はインターネット。新華社通信のサイトのこと。



博物館・美術館紹介◆出光美術館

出光美術館が東京・丸の内、お濠端に面した帝劇ビル九階に開館したのは、昭和四十一年（一九六六）のこと。コレクションの規模などから国の財団法人として開設、主に東洋の古美術を紹介する企業系の美術館として開館した。当時、ロビーから皇居をのぞむその光景は「都会のオアシス」という愛称を呼んだ。これまで毎年計六本の展覧会をすべて企画展として開催してきたが、常設展示室をもたないことから、近々では中央線・三鷹「中近東文化センター」内の一室において、陶磁器を中心とした名品の常設展示も開始しはじめた。また二〇〇〇年から新たに福岡・門司の地に出光美術館（門司）が開館。幅広いコレクションの一端を福岡でも楽しんでいただけるようにと、活動拠点を広げている。

出光美術館の収蔵品数は、公称約一万件。国宝二件をはじめ、重要文化財四十九件、重要美術品八十八件を誇る国内屈指のコレクションである。その内、書跡は、国宝「見努世友」ほか古筆切優品から江戸期は光悦や唐様の書までにおよび、所蔵品の数はおよそ二〇〇件あまりとなっている。

さて開設者・出光佐三が七十有余年にわたって蒐集し愛蔵した美術品を私蔵せずに公開しようと決めた時、海外の企業と同等の立場をもつためには、事業の芸術化が欠かせないという理念を持っていた。晩年には「私の一生というものは、眼で美術品を見て、心で人の美しさを見るというようなことで、いつも美というものにリードされてきたような気がする」と語っている。こうした理念の下、学芸員を中心に美術品の調査研究はもとより、斬新で独創性にあふれる企画・展示づくり、愛好家や教育施設との積極的な連携をすすめる教育・普及事業、そして将来へ大切な美術品を継承するための保存・修復活動を継続している。

その出光コレクションの中核をなすのは、禅僧・仙厓の書画。千をゆうに超す数の独占的なコレクションは国内外にも知られている。これは出光発祥の地がすなわち九州であるところに所以があるもので、その流れから文人書画のコレクションも充実している。そしてこれらの美意識の淵源を紐解く水墨画では、牧谿、玉澗から雪舟、狩野派、長谷川等伯らの描く優品までカバーし、加えて煎茶道具や青銅器、中国陶磁のコレクションも加えている。その上で、日本の文化への深い愛情と理解を示し、国宝「伴大納言絵巻」を筆頭に、「佐竹本三十六歌仙絵」から室町、江戸期にいたるまでのやまと絵作品、あるいは俵屋宗達、尾形光琳・乾山、仁清らの琳派作品も後に加えられている。

しかし二〇〇〇年を迎えて以降、当館が大きく業務方針の変更をおこなったことは、皆さんの記憶に新しいのではないだろうか。東京国立博物館との提携により実現した「長谷川等伯・松林図屏風展」を皮切りに、それまで館蔵品による企画展示一色であった活動が見直され、美術品をより深く理解し、楽しんでいただこうと、展示作品の一部を交流のある他館より出品協力いただくことで、独自の企画を次々と開催。その結果、書の関連では、二〇〇二年「書の名筆―高野切と蘭亭序―」展、二〇〇四年には第二弾「書の名筆―三色紙とちらし書き―」展を開催し、好評を博した。

さらにここ数年は、教育普及事業にも力をいれている。主に首都圏の社会教育施設や学校、愛好家の団体との連携をおこない、自主的な作品鑑賞活動を促進している。書写書道教育の現場においても近年鑑賞指導が唱導されるようになったが、学芸員が学校や各地施設に赴いて出前授業を担当したり、ワークショップの企画開催の手助けや、鑑賞指導の具体案作成のお手伝いなどをおこなっている。鑑賞体験を一面的なものに終わらせてはならないとするこうした美術館の本質的な活動により、書跡ばかりでなく様々な分野の作品を合わせてご覧いただき、美への理解者がたくさん集う会場づくりの実現を目指したい。そのためには皆さんのご支援は不可欠である。本会報の場を借り、まずはこれまでのご助力に対し御礼を述べるとともに、改めて今後ともご協力とご指導、ご支援を頂戴したい。

（笠嶋忠幸）

談話室

沙翁のことば

河野　隆

書学と書作の両面に優れた業績を残した人として、現代中国ではすぐに沙孟海の名が浮かぶ。沙翁は文革後の難しい時局に第四代西泠印社社長に就任し、文墨界を牽引した。高等書法教育の面では浙江美術学院（現・中国美術学院）の書法系の教学の礎を築いた。高潔な人柄と深い学識をにじませる雄渾な書風は、杭州を中心に圧倒的な支持がある。大字になっても骨格が揺るがず、泰然自若とした大人の風を示す点では、少し前の時代の郭沫若と共通性が強い。昨秋のシンポジウムの席上、河内利治理事が紹介した「没有修養、不要写字」という沙翁のことばは、書作の背骨をなす書学研究と人格陶冶の重要性を説いたものだが、書作が単なる筆戯の所産に終わらぬ為にも、我々はしっかり心に留めなければならないと思う。

平成十七年春近況報告

池田利広

今年になって展覧会が立て続けにあった。三ヶ月の短期間であったが、それなりに一作ごとに意欲的に取り組めたと思っている。しかし、最近その反動か、書作に色気をあまり感じなくなってしまった。驕りなのか諦めなのか、それとも倦怠期に陥ったためか。折しも、日本書芸院の役員展で「山本發次郎コレクション」の特別展観があった。白隠、慈雲や良寛などの江戸時代の墨蹟が出陳された。それらは、まるで技の巧拙に気を留めることなく、あたかも精神の開放こそが自国の書の本質ではないのかと諭しているかのようであった。新たな魅力の発見である。

書画に合わない篆刻

松村一徳

書画において、製作する毎に相応しい印も自ら刻す、という理想像があります。とはいえ諸条件から、篆刻家に依頼した落款印を用いるのが現状ですが、書画を支えるものだけにお気に入りの落款印は宝物です。篆刻の役割の一つは、印章が七千年前に誕生して以来となる本体を証明保証する事です。しかし最近の問題は、作品自体は悪くないものの、主張が優先し書画に合わない篆刻の誕生です。篆刻の発展は喜ばしい事ですが、本来の役割を果たせない現象は、時流に乗り変化した篆刻が独立歩行し始めた進化として、素直に喜んでよいものでしょうか。

生きた現場

萱のり子

先日、フィールドワークに関する研究会に参加した。科研の海外学術調査枠で活動している研究者連絡会である。アフリカ先住民の生活調査から極寒地への環境調査まで、文理を問わず、多様なフィールドワークの実態が見聞できた。調査には、たえず予測を超えることが待ち受けている。だから研究の現場では、既存のモノサシの適用は通用しない。事象（世界）をどう切りとり、どう座標軸を立てるのかが常に問われる。われわれ書にかかわる者も、あらゆる現場で忘れてはならない視点だろう。

急就章博

鍋島　稲子

本学会立ち上げに意欲的だった師・伊藤伸が生前、書道博物館の所蔵品中、特に執心したのが「急就章博」だった。落書きのような書にこだわったあたりに師一流の遊び心を感じたものだ。ところで、昭和十年来日の折に書道博物館を訪れたポール・ペリオもまた、「急就章博」に垂涎したという。しかし、購入にまつわる不折の苦労譚を聞くにつけ、その入手をあきらめ嘆息を残して去ったらしい。この経緯はごく最近古新聞の記事で知ったが、その時は、記憶に留めている師の姿とペリオの写真とがだぶったものだった。今更ながら、五十路にさしかかったばかりでの急逝が悼まれる。今年は師の十七回忌にあたる。

◆会員動静

○黒野貞夫（会員）＝第六十一回日本芸術院賞受賞
○古木誠彦（会員）＝九州女子大学助教授昇任
○大迫正一（会員）＝九州女子大学専任講師新任
○吉田光明（会員）＝聖徳大学教授新任
○湯沢聡（会員）＝安田女子大学助教授新任
○上小倉一志（会員）＝皇学館大学助教授新任

◆訃報

○竹田延輝（悦堂）　毎日書道会常任顧問。十月二十九日、八六歳。
○種谷久太郎（扇舟）　毎日書道会最高顧問。十二月二日、九十歳。

編集後記

◆先日小暇を得て、近所の川端龍子記念館まで散歩してみました。龍子が朝夕に礼拝していたという仏像とともに、絵画も併せて陳列されていて、興趣ある展示でした。仏への思いと、作品制作の態度を観ていると、自然と古典臨書のことを考えてしまいました。（小川博章）

◆立夏を過ぎ緑の輝く季節となりました。大学では教育実習期間を迎え、初めて巡視に出る立場として実習生同様緊張しています。（柿木原くみ）

◆ここ数年、鉄斎にとりつかれたように、ゆかりの地を旅している。先般は小豆島・寒霞渓へと赴いた。奇岩連聳の道を登らんとしたが、ここもまたサル被害に悩まされているとの事。やむなく断念、淋しくロープウェイからの眺望で我慢した。（笠嶋忠幸）

◆昨春、古河市篆刻美術館開催「古筆切と極印」展の関西版「古筆と極め」展が陽明文庫のご助力の下、京都の茶道資料館で開催された（七月十日迄）。古筆とその鑑定は今後もっと注目されていくべきものだと思う。（高城弘一）

◆滅多にない大型連休と聞いて「さあ、部屋を片付けるゾ」と頑張ってみたものの、結果は一平方メートル位広くなった程度。次々来る郵便物でまた元の木阿弥。何時になったら快適に過ごせるのやら。（杉）

◆20代、本の購求に余念なく、30代、書庫の設置に汗し、40代、「本は買うだけで為になる」が持論となり、「読未見書斎」の室名にも共鳴したが、50の今、収納まことに思案に余る。（鳳）